



Top Interview

トップインタビュー

鳥取県立厚生病院 院長

井藤久雄氏

Hisao Ito

医師にとって欠かせないのは
熱い思いと飽くなき探究心

「医療を行うのは、医師という人間です」

鳥取県立厚生病院院長の井藤久雄氏から発せられたこの言葉には、大きな意味がある。「患者さんに満足していただける医療を行うためには、良い医療を提供したいという熱い思いと飽くなき探求心が欠かせません。いくら医療機器が進歩しても、医療を行うのは医師という人間。そこは決して変わりません。やはり、最後は人としての魅力なんですよ」。そう語る井藤氏の表情には、人間味があふれ、人を引き付ける笑顔があった。

鳥取県立厚生病院は、急性期医療を提供する、鳥取県の中部地域における唯一の公的基幹病院だ。地域密着型の医療はもちろん、がん診療連携拠点病院や災害拠点病院、感染症指定医療機関として多種多様な機能を担っている。近年は内視

どんな小さなことでも しっかりと向き合い、 日々、進化する 病院であり続けたい

鏡手術や、小児・周産期医療、さらに先端技術を用いた急性期医療に力を入れ、病連携や診療所との密な連携を図りながら地域完結型の医療をめざす。

「全国的に小児・産科医不足の問題がありますが、当院は産科医4名体制で、年間約600件を超える分娩を行っています。小児科医は5名体制で、医師会と連携しながら小児科の診療にあたり、鳥取県中部地区では当院が唯一の小児科の入院施設で、新生児医療も行っています。また、主要五大がんは大学病院レベルの高度な医療を提供し、時間外の救急患者数は平成24年は2万件を超えるなど、人口10万人の中部医療圏の中心的役割を担っています」

井藤氏が鳥取県立厚生病院の院長に就任したのは平成25年4月。井藤氏の専門は「病理」であり、病理出身の院長は全国的に珍しい。

井藤氏は昭和49年に広島大学医学部を卒業後、広島大学医学部附属病院の第二外科に入局。最初は病理医ではなく、移植外科医をめざしていた。

「移植手術を行う第二外科に入局する前に、西ドイツのハノーファー医科大学への留学の話があり、その条件が、『最初の1年間は病理をさせて欲しい』というものでした。2年目から外科の研鑽ができると思いい留学したんですが、結局、病理に3

年いたんです(笑)」

井藤氏は帰国後、再び第二外科の移植グループで外科医としての研鑽を積んだが、2年後に、第一病理に転任する。

「今でもそうですが、病理医が足りなくてね。病理に進んだら、即、君は助手だ、講師だ、助教授だって言われて(笑)。それで病理の道を進むことになったんです」

平成4年には、鳥取大学医学部第一病理の教授に就任。「消化



器がんの分子病理、臓器移植の病理」を専門に活躍してきた。井藤氏は、日本病理学会の専門医であり、日本臨床腎移植学会の認定医という、病理医と臨床系の資格をもつ異色の医師である。移植外科から病理への転身。

そして教授という教育職から、院長という医療職への転換。井藤氏は医師人生を振り返りこう言った。

「病理医になって良かった」

病理医は、外科はもちろん、ほとんど全ての診療科と関連し、多くの医師と関わりをもつ。井藤氏が辿ってきた経験は、各診療科の知識の習得と幅広い人間関係を生み出してきた。院長就任の話が来たとき、井藤氏はある人物に相談をした。そのとき、こう言われたという。「病理医

はほとんどの診療科を知っている。だから院長に最適だ」と。こうして院長に就任した井藤氏は「日々、進化する病院でありたい」という強い意志で、時代と共に高まる患者さんや地域住民のニーズに応える病院づくりに努めている。

「戦前は町の顔は寺でした。戦後は長いあいだ銀行だった。これからは、病院がその町の顔にならないといけないと思うんです。アメニティーの改善はもちろん、患者さんや住民の皆さんからの意見や、スタッフが気付いたことなど、それが仮にどんなに小さなことでもきちんと向き合い、日々改善を積み重ね進化していきたい。そういう病院であり続けたいですね」

鳥取県立厚生病院はスタッフ全員の顔を見ることができる風通しの良い環境にある。医局もワンフロアに集約され、診療科の垣根はない。こうした人と人との間に壁が存在しない環境は、積極的なコミュニ

ケーションとスタッフ一人ひとりのきめ細かな心配りを生み出し、小さな気づきをもたらす。この環境は医師教育の場としても最良だ。

「当院では研修医と指導医が密なコミュニケーションを取りながら、診療科の垣根を越えて研修ができます。また、地域のほとんどの、特に2次救急以上の患者さんが搬送されるので、幅広い疾患を診ることができ、多くの手技を経験することができます。もちろん院内保育所や当

直免除など、子育て中の女性医師に働きやすい環境も整えています」

あと10年は、医療現場に立ち続けたい

医学生は、都会の大病院で最先端医療を経験できるように目が行きがちだが、医師のスタートにその経験は果たして必要なのだろうか。井藤氏は若手医師にこうアドバイスを送る。「初期臨床研修に必要なのは、





ありふれた疾患で来院された患者さんを、しっかりと診察出来るようになること。そうした幅広い知識・技量を持ったうえで、専門性を確立して欲しい」。そして、医療は日進月歩であり、日々進化している。医師という仕事は常に新たな知識や技術を

吸収し続けなければ、医師は医師としての役割を担えなくなる。「若い先生方には学会などに積極的に参加し、新しい知識や技術をどんどん吸収して欲しい。そして医師はチーム医療のリーダーであり、若い医師も、いつかは教える立場になる。学ん

だ知識や技術を自ら発信し、リーダーシップを養って欲しい。そして広く社会の接点を持ち自分の世界を広げて欲しいです」と、井藤氏は、優れた医師として、そして人間として必要な力を説く。

井藤氏は現在でも病理医として現場に立つ。顕微鏡を覗く眼光は鋭く、患者さんの運命を左右する重要な判断に、全身から研ぎ澄ませた集中力が放たれている。

「この歳になると外科医はメスを置くタイミングで悩むんです。病理医は経験の蓄積が大きいですから歳をとってもできるんですよ」と井

藤氏は大きく笑う。

井藤氏の趣味はウォーキング。毎朝、医師住宅から病院までの2.5キロの道のりを歩いて通い、院内での移動を含めると一日1万歩を歩く。井藤氏はバイタリティーに溢れ、眼は活き活きと未来を見つめている。

「大学にいたときは研究があった。それに代わる何か新しいことを見つけ医療に貢献したいですね。そしてあと10年は医療現場に立ち続けたいです」

10年後、井藤氏は75歳だ。井藤氏には医療を追求する熱い心と飽くなき探求心が無限にある。

Profile

鳥取県立厚生病院 院長

井藤 久雄 いたう・ひさお

- 1974年 広島大学医学部 卒業
広島大学医学部附属病院 研修医
西ドイツハノーファー医科大学病理学研修所 助手
- 1977年 広島大学医学部附属病院 医員(第二外科)
- 1978年 広島大学大学院医学研究科入学(第二外科)
- 1983年 呉共済病院臨床病理科 医長
- 1987年 西ドイツフンボルト財団招聘研究員、
ハノーファー医科大学
- 1988年 広島大学医学部 講師(第一病理)
- 1989年 広島大学医学部 助教授
- 1992年 鳥取大学医学部 教授(第一病理)
(2002年4月、器官病理学分野に改称)
- 2003年 鳥取大学医学部長(併任)
- 2007年 鳥取大学副学長(併任:医療・医学教育担当)
- 2011年 鳥取大学理事・副学長(研究・米子地域担当)
- 2013年 鳥取県立厚生病院 院長
倉吉総合看護専門学校 校長
鳥取大学名誉教授、特任教授

Doctor in focus
注目の医師！

鳥取大学医学部附属病院 次世代高度医療推進センター センター長

難波栄二氏

平成24年10月、鳥取大学医学部附属病院に、

ゲノム医療、再生医療、医療機器開発の3部門から成る

「次世代高度医療推進センター」が開設。

センター長の難波栄二氏がめざすのは、

高度・先端医療を通して、人々がより良い人生を送るための

幸せになれる医療だ。



新たな医療を実用化し 一般の医療に取り入れる

平

成 24年10月、鳥取大学医学部
附属病院（以下、鳥大病院）で
は、再生医療の応用に取り組み再生医
療部門、遺伝子診断に取り組みゲノム
医療部門、内視鏡などの医療機器の
開発に取り組む医療機器部門の3分
野から成る、「次世代高度医療推進セ
ンター」を開設した。センター長に就任
したのは、鳥大病院の遺伝子診療科の
教授である難波栄二氏だ。

難波氏は研究開発だけではなく、
センター長として3分野の統括や、各
診療科はもちろん、他学部との調整
役、さらに「産業化臨床研究部門」の
設置によるイノベーション人材教育な
ど、その役割は幅広い。

「遺伝子診断や乳房再建、内視鏡
機器や介護用ロボットの開発だけで
はなく、ゴーシエ病という遺伝性難病
に対する治療も世界に先駆けて開発
するなど、難病に対する治療研究も
行っています。こうした研究開発を、

より効率的に医療の実用化につなげ
る。橋渡し研究」と、新しい医療を一
般の医療の中に入れ込んでいく。臨
床研究も当センターの大切な役割
です。それには診療科の枠を超えた
横断的な連携が必要で、その調整役
も重要な仕事なんです」

自分を活かしながら、 多くの経験を積むために

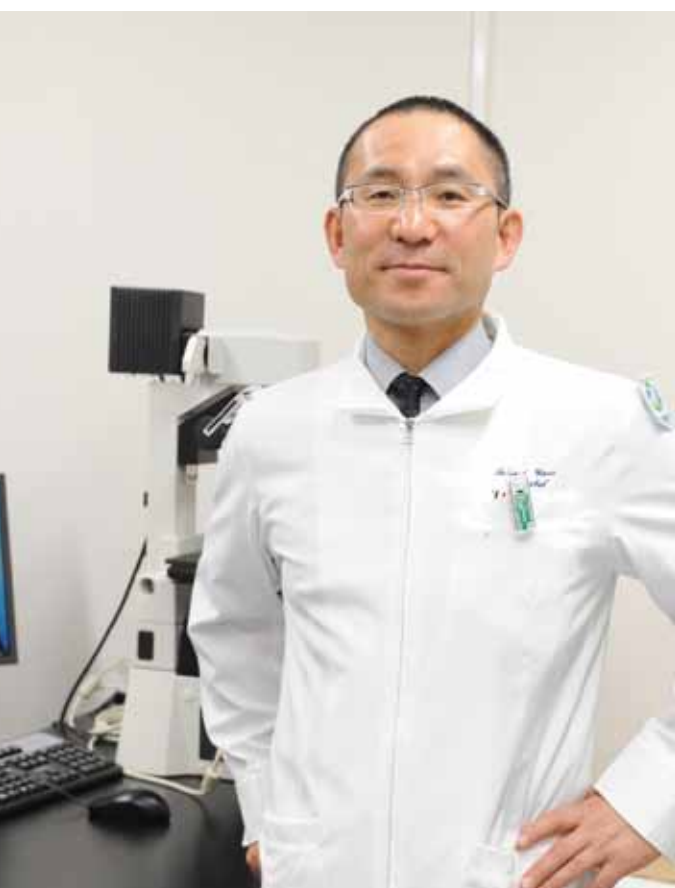
難

波氏が現在に至るまでの軌
跡は変転の連続だった。鳥取

大学医学部を卒業後、もともと物
理学に興味があり、研究思考が強
かった難波氏は、当時、研究のアク
ティビティが高いとされていた脳神
経小児科に入局する。「入局して驚
いたのが、臨床現場をどんどん与え
てくれたんです。でも9割が診断す
ら付かない子どもたちで、原因が分
からなければ治療ができない。その
ジレンマに苦しみましたね」

臨床を4年経験した後、難波氏
は教授の勧めにより、国立武蔵療養

所・神経センター（現・国立精神・
神経センター神経研究所）の開設
と同時に赴任し、神経難病の基礎
研究に打ち込む。その後、米国ノー
スカロライナ大学に留学し、遺伝病
の原因解明に没頭した。3年後、難
波氏は、帰国と同時に鳥取大学医
学部脳神経小児科の医局長に抜擢
される。難波氏は医師の獲得にも
力を入れ、医局長時代には毎年平
均2.5人もの入局があった。医局長を
4年半務めた後に鳥取大学の「遺
伝子実験施設」の専任助教教授に就
任。それから現在まで遺伝子研究の



鳥取大学医学部附属病院 次世代高度医療推進センター

本センターは再生医療部門・ゲノム医療部門・医
療機器部門の3部門で構成。基礎研究者、臨床
研究者、また、診療科を横断したさまざまなスベ
チャリストが集合し、高度・先進医療や、問題解決
型の医療機器開発を通して、次代の医療及び福
祉に貢献していく。



道を本格的に歩むことになる。難波氏は自分がやりたいことではなく、そこで何が困っているか、そのために自分ができることは何かを大切に、医師人生を歩んできた。

「これまで自分の意思ではなく、自分が必要とされている場所に赴任してきました。僕は頼まれたことにノーと言えないんです。そのため、多い年は1年で4回引越したこともあるんです(笑)。実は周りの人の方が自分という人間を理解しているんですね。周りの人が勧めることは、断らない方が自分を活かすことができる。そして多くの経験を積むことができるんです」

難波氏の言う「多くの経験」は、医

師業以外も含まれている。「遺伝子実験施設」の立ち上げ時には、建物の設計図作成や実験機器のセットアップまで関わり、「生命機能研究支援センター」の開設では、文部科学省との交渉や、それに伴う書類作りも行った。「本業以外の貴重な経験もできました。でも一時期それに忙殺され研究に手が回らなくなったこともあったんです」と、難波氏は笑う。

人と向き合い、人の幸せを 実現できなければ意味がない

波氏が専門とする遺伝子医学の進歩は目覚しく、特に診断技術においては著しい正確さをもたらしている。遺伝子診断は、予防医療としての恩恵が注目されがちだが、重要なのは遺伝子診断を考えている人の心の支援だ。

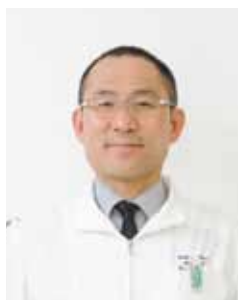
「昔は、分からないことが分かることでデメリットは一切ないと思っていたんです。でも、それは違う。遺伝子情報は、その人の人生観を変えてし

まう。それは当人だけではなく。家族の問題にもなってくる。今では多くの遺伝子情報を一度で網羅的に解析できるようになり、求める情報以外の予想もしなかった遺伝子異常が見つかることもある。そのときどうするか、それが重要なんです」

「次世代高度医療推進センター」には、日本全国で138名しかいない認定遺伝カウンセラー2名が遺伝カウンセリングにあたり、難波氏自身もカウンセリングに携わり、心の支援を行う。

「その人の遺伝子によって分かった情報を、どう判断し、どう対処して、その人の人生を最適な道へと導けるか。それが遺伝カウンセラーの役割であり、遺伝子に携わる者として大切なことです。遺伝子検査で人が不幸になったら全く意味がありませんから」。そして難波氏は力を込めて言葉を続ける。「高度・先進医療に携わる医師が優れた医師ではない。患者さんとして寄り向き合い、その人の幸せを実現できる医師が優れた医師なんです」

Profile



鳥取大学医学部附属病院 次世代高度医療推進センター センター長

難波 栄二 なんば・えいじ

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|--------------------------------|
| 1981年 | 鳥取大学医学部 卒業 | 1995年 | 鳥取大学 遺伝子実験施設 助教授 |
| 1982年 | 松江赤十字病院 小児科 | 2003年 | 鳥取大学 生命機能研究支援センター 教授 |
| 1983年 | 鳥取大学医学部附属病院 脳神経小児科 | 2007年 | 鳥取大学医学部附属病院 遺伝子診療科 科長(併任) |
| 1985年 | 国立精神・神経センター 神経研究所 | 2009年 | 鳥取大学 生命機能研究支援センター長 |
| 1987年 | 北九州市立総合療育センター 小児科 | 2012年 | 鳥取大学医学部附属病院 次世代高度医療推進センター長(併任) |
| 1988年 | 米国ノースカロライナ大学 脳と発達研究所 | | |
| 1991年 | 鳥取大学医学部 脳神経小児科 | | |

Close Up Women's
vol.05

輝 き 続 け る
女 性 医 師

“どう生きるのが楽しいのか”
を常に考えながら
理想の自分像を追い求める



ながい麻酔科クリニック 院長

永井 小夜氏

ながい麻酔科クリニックでは、手術前の患者さんの身体状態を評価する術前外来と、近隣の医療機関と連携して治療を行う出張麻酔を提供している。さらに、小児の日帰り全身麻酔も実施するなど、全国的に珍しい“麻酔”を専門とするクリニックだ。院長の永井小夜氏は、“どう生きるのが楽しいのか”を常に考えながら、理想の自分像を追求し続けている。今や、この地域にとってなくてはならない存在となった永井氏の、現在に至るまでの軌跡とは。





患者さんの不安を 少しでも取り除きたい

玄関に一歩足を踏み入れると、天井が高く広々とした気持ちいい待合室と笑顔のスタッフが出迎えてくれる。音楽好きの院長自ら選んだという心地良い音楽が院内を流れ、訪れる人は瞬く間に穏やかな気持ちになる。ここには病院特有の張り詰めた緊張感が一切ない。

院長の永井小夜氏は「クリニックの設

計にはとてもこだわったんです。患者さんは病气や手術の不安でもとても緊張してきます。その緊張感を少しでも取り除けるようなクリニックにしたかったんです」と、少しはにかんだ優しい笑顔を見せる。小さい頃は喘息がひどく、学校を休みがちだったという永井氏。高校生になり、健康を取り戻した頃、「今度は医者にな

なって人を元気にさせてあげたら」と、叔

父の言った一言で医師をめざし、鳥取大

学医学部に進んだ。永井氏が麻酔科の道

に進んだのは、病院実習で見た麻酔科医

たちの姿に憧れたからだ。「当時、鳥取大

学では救急医療も麻酔科が担当してい

たんです。救急医療を行う先輩医師たち

の機敏な動きがとてもかっこよくて」。こ

うして永井氏は鳥取大学医学部麻酔科

学講座に入局する。永井氏が医師になっ

た当時は、女性医師がまだまだ珍しい時

代だった。ある日、永井氏は、心肺蘇生で

助けた患者さんの親族から、先生はどこ

にいますか？と聞かれたことがあった。

「それがきっかけで、自分を名乗るときは

『麻酔科医師の永井です』と言って、医

師であること、を強調していました(笑)」

理想を追求し 勤務医から開業医へ

入局当初は手術麻酔にはあまり興

味がなかったという永井氏だが、やがて

手術麻酔を追求したいという気持ちが

強くなっていく。

ながい麻酔科クリニック

〒683-0802 鳥取県米子市東福原7-10-3

「ながい麻酔科クリニック」には、小児の日帰り全身麻酔を行うため、子どもも多く訪れる。院内には、手術前のストレスを抱えた子どもが安心して術前診察を受けられるよう、キャラクターのポスターやぬいぐるみがさりげなく置かれるなど、病院色を感じさせないきめ細かな心配りに溢れていた。また永井院長は、救急蘇生法のDVDを鳥取県西部医師会と西部消防局と協力して作成するなど、地域の命を守るための取り組みも行っている。患者さんの目線、地域住民の目線をもった永井院長は、この地域の健康と命を守る必要不可欠な存在に違いない。



鳥取で輝く女性医師

「手術麻酔も、救急やICUと非常に密接なつながりがあるんですね。救急は緊急的な重症管理、ICUは長期の重症管理、手術は数時間の重症管理。救急もICUも手術麻酔も、同じ重症管理だということが分かったんです」。永井氏は手術麻酔を研鑽しながら、さらに小児麻酔を習得するため、大阪府立母子保健総合医療センターで研修を行う。平成

15年には鳥取大学医学部麻酔科の医局長に就任した。永井氏はこの頃から、勤務医としての自分の理想に近づいたと感じ、今後の目標を模索していた。そんなある日、永井氏は産婦人科クリニックから採卵手術の麻酔について相談を受ける。

「これがかきつかけで、麻酔科の開業医として地域のクリニックと連携しながら、地域医療に貢献しようと思っただけです」

常に目標をもち
チャレンジし続ける

永井氏は、この地域の医療にとって今や必要不可欠な存在である。小児の日帰り全身麻酔も行い、近隣の産婦

人科で帝王切開があれば、休日や夜中も駆けつける。「歯科医師会の先生と県立総合療育センターと私の三者で協力し合い、開業してからの目標だった発達障害の患者さんの全身麻酔下の歯科治療も行っています」と、永井氏の顔に充実した表情が浮かぶ。さらに永井氏は、一次救命処置の講習会を開くために集まっている医療従事者の

チーム、「救命道場」を主催している。永井氏が行う市民講習は、とても分かりやすく、ためになると評判だ。また、東日本大震災の際には、日本医師会災害医療チーム(JMAT)として医療支援に参加。そして月に2回、

大学に赴き、麻酔科の手伝いをしながら新たな技術や知識を吸収するなど、医師として精力的に活動してい

る。永井氏に医師としての原動力を聞くところ、答えが返ってきた。

「私はいつも、どう生きるのが楽しいのかを考えているんです。その楽しさへの追求が、結果として地域への貢献につながれば良いなと思っただけです」と、永井氏は微笑む。その言葉と表情に、医師としての充実と幸せがはつきりとみえた。



ながい麻酔科クリニック 院長

永井小夜 ながい・さよ

- 1991年 鳥取大学医学部 卒業
- 鳥取大学医学部 麻酔科学講座へ入局
- 1993年 鳥取赤十字病院 麻酔科勤務
- 1997年 鳥取大学医学部附属病院 助手
- 大阪府立母子保健総合医療センターにて小児麻酔・産科麻酔研修
- 1998年 鳥取大学医学部附属病院 助手
- 2003年-2004年 鳥取大学医学部麻酔科 医局長
- 2006年10月 ながい麻酔科クリニック 開業
- 2011年7月 現クリニックへ移転



Our Style

鳥取の病院から

特定医療法人財団 同愛会 博愛病院

大正10年の設立以来、鳥取県西部における中核病院として急性期医療を担い、地域医療に貢献し続けてきた「特定医療法人財団 同愛会 博愛病院」。患者さんを“ずっと見守り続ける”後方支援体制の充実した、地域で評判の病院だ。その背景には、治療だけが医療ではないと語る病院長 角賢一氏の熱い思いがあった。

急性期から在宅まで
患者さんをずっと
見守り続ける医療を

入院患者や、その家族にとって最も不安なことは、退院後の医療である。もしも身内が脳卒中で倒れ、後遺症が残ってしまったとしたら、不安は募るばかりだろう。入院中の懸命なリハビリテーションで、後遺症を徐々に改善できたとしても、いずれは退院しなければならぬ。では、退院後も必要となる医療をどこで継続させていくのか。もちろん再発の恐れだってある。次の医療の受け入れ先が見つかるまで、不安が消え去ることはない。

開設90年以上という歴史を誇る博愛病院は、鳥取県西部で急性期医療



を担いながら、患者さんのその後についても真摯に向き合う病院だ。

「現在の医療は、退院後の支援体制なくしては完結することができなくなっています。急性期の患者さんだけを診るだけではなく、在宅介護まで含めたターミナルケアに関するということが、当院の特徴です」。病院長の角氏がそう語るように、博愛病院には急性期病床以外にも回復期病床や療養病床、介護老人保健施設や訪問看護ステーションなど、後方支援体制が整えられている。

「特に当院は高齢の患者さんが多いのですが、後遺症を抱えた高齢者は、退院しても家に帰れないことが

あります。核家族化が進んでいるという背景もありますが、受け入れる家族も不安になってしまっているのです」。

こうした不安を解消するために何ができることはないか。そう考えた角氏は、自らケアマネージャーの資格を取得した。24時間対応の訪問看護など、行き届いた配慮は大学病院をはじめ地域の医療機関から大きな信頼を得ている。

地域に密着した医療を提供することもまた、博愛病院の理念であ

患者さん本位の 地域に密着した 医療を提供する

る。病気の早期発見も、地域医療を

担う病院にとって重要な取り組みの一つだ。その一環として、新たにCAD（コンピュータ支援診断）方式の診断も可能とした最小画素数50μmのフラットパネルによるマンモグラフィも導入。乳癌診断の精度を上げるなど、病気の早期発見をより確実なものとしている。

17人に1人が乳癌になるといわれている現在、強いチームワークが大切だと角氏は語る。外科は現在、専門医も含めて6人体制だが、全員が乳癌の健診から治療、フォローまでを担当している。

良好なチームワークによる連携は、急性期の診療においても重要だ。

「横の連携が取りやすいので、困

ることがあれば連絡を取り合っただけで迅速に対応できる。そこは中規模病院ならではの良さだと思います」

さらに角氏は、こう語ってくれた。「治療したから終わりとか、あるいは再発したら受け入れられないとか、それでは医療としては不十分です。だからこそ、患者さんと家族のために、後方支援をさらに充実させていくことが、私たちの使命だと思います」

高齢化する社会において一人ひとりをずっと見守り続ける博愛病院は、これからも地域住民の心の拠り所であり続けるに違いない。



特定医療法人財団 同愛会
博愛病院の見学など
お問い合わせ先

特定医療法人財団 同愛会
博愛病院

〒683-0853

鳥取県米子市両三柳1880番地

TEL: 0859-29-1100(代)

FAX: 0859-29-6322

URL: <http://www.hakuai-hp.jp/>



鳥取の研修医たち

独立行政法人 国立病院機構 米子医療センター

平成25年4月に基幹型臨床研修病院として初めての研修医を迎えた米子医療センター。

その第一期生である西川涼馬先生と、指導医である診療部長(呼吸器内科)の富田桂公先生が対談しました。会話から見てきた米子医療センターでの研修の魅力とは？

積極的に動くほど、
有意義な研修ができる環境

富田先生：西川先生は愛知県名古屋出身で、大学卒業後は地元に戻る医師も多いなか、鳥取に残り、ここで初期研修をしたいと言ってくれた。嬉しいですね。

(研修医)西川先生：将来の目標の一つが医学教育に携わることなんです。その場所として、やはり母校である鳥取大学が一番だと感じました。それで初期研修先は鳥取大学の近くでと考えました。米子医療センターを選んだのは、指導医の先生と



の距離の近さや、積極的に動くほど有意義な研修ができるであろう環境に大変魅力を感じたんです。それに研修医の第一期生という期待感もありました。

富田先生：若い先生で教育のことまで考えてくれているなんて素晴らしいですね。西川先生は非常に熱意があつて、めざす医師像もしっかりある。研修プログラムの第一期生として、こういう先生が来てくれたらいいなと思つていたんですよ。

(研修医)西川先生：嬉しい言葉ですね。

富田先生：若い医師はベテラン医師に経験では絶対に勝てません。でも、

熱意では勝てる。研修医は強い熱意があれば、それで100点満点だと思つています。熱意をもってチャレンジしながら、少しずつ技術を高めていけばいいんです。

(研修医)西川先生：経験のない僕が、病院にとつて少しでもメリットを生み出すにはどうすればいいのか考えたんです。それが挨拶でした。当たり前のことかもしれませんが、廊下や病室ですれ違う際には必ず元気に挨拶することを続けています。

富田先生：西川先生はマンパワーとしてはもちろん、病院に活気を与えてくれるんですね。熱意のある研修医の先生がいることで、教える私たちも、このままじゃ抜かれてしまつ、自分も負けてられないと思つんです。

将来の目標を共にさがし 熱意のある医師を育てたい

富田先生：平成25年4月から稼働した「米子医療センター」卒業後研修プログラムは、日常診療の中で遭遇するコモン・ディーズを多くみてもらうことを特徴としています。選択肢

の裾野が広いプログラムをめざし、西川先生には自分の興味ある医療に積極的に関わってもらっています。

(研修医)西川先生：僕は腎臓移植にも興味があるのですが、外科の先生から、「時間があつたら移植手術においてよ」と声をかけて頂き、ときには術野にも入れてもらえます。やりたいことをさせてもらっている感じなんです。他病院へ研修に行っている同期からは、とても羨ましがられますね。

富田先生：西川先生には、いろんな先生が声を掛けてくれますよね。一対多数だから、大変だと思えます(笑)。

(研修医)西川先生：いやいや(笑)。非常にありがたいです。ここは病院スタッフの連携が密で、研修が始まって一ヶ月経った頃には全診療科の先生の顔と名前を覚えてしまいました。それに10年目を超えた経験豊富な先生が多いので、各々の哲学や人生観、死生観、医療に対する姿勢などを聴けたりするのは僕の宝です。

富田先生：西川先生にはいろいろとチャレンジして欲しいですね。



それと、1年間でいいので、ぜひ海外留学を経験して欲しいです。私は英国インペリアル大学に留学した経験がありますが、いろんな気づきを与えてくれ、考え方が変わりました。イギリスで実感したのは、「捨てる神あれば、拾う神あり」。車が故障して5時間立ち往生して困っていた時に、一人のイギリス人が助けてくれたんです。そのとき、どんな小さな事にも気が付くことができ、困っていたら直ぐに手を差し伸べることができる、「拾う神」でいたいなと思つたんです。

(研修医)西川先生：富田先生は非常に教育熱心で、事あるごとに僕の

Succeed

鳥取の研修医たち



5月には新病棟が完成しますが、やはり中身が大切。よりよい教育環境をさらに整え、西川先生のように、熱意があり、自分のめざす医師像をしっかりとった医師を育てていきたいですね。

(研修医)西川先生…ここは本当にいろんな経験ができ、必ず将来めざす目標が見つかるはず。僕は将来大きな目標があるんです。少しでも鳥取県の医療を盛り上げて、どこよりも安心して人々が住むことができる鳥取にしたい。そして全国から人が来て、鳥取の発展に大きく貢献できたらなと思っていました。

富田先生…すごい。もう西川先生に言うことがないよね(笑)。米子は水も食べ物も美味しい。スキー場へは車で30分以内で、海も近いので夏はすぐに泳ぎにいける。土地環境も最高なのでぜひ来て欲しいですね。
(研修医)西川先生…米子は静かでもとても住みやすくて、もう都会には戻れないですね。



研修1年目

西川涼馬 (にしかわ・りょうま)

●出身 愛知県 ●出身大学 鳥取大学医学部 ●趣味 音楽演奏



指導医

富田桂公 (とみた・かつゆき)

●出身 鳥取県 ●出身大学 鳥取大学医学部 ●所属診療科 呼吸器内科(診療部長)

1987年 鳥取大学医学部 第三内科入局、初期研修を受ける
1999年 英国インペリアル大学心臓肺研究所に2年間留学
2007年 近畿大学医学部 呼吸器・アレルギー内科准教授
2012年 米子医療センター呼吸器内科診療部長



独立行政法人国立病院機構 米子医療センター

平成25年に稼働した「米子医療センター卒後研修プログラム」では、優秀な指導医の下で、日常診療で頻繁に遭遇する病気や病態あるいは救急症例を担当医として自ら体験し、さらに高度な疾患、手技を体験することができる。特に、当院は非血縁者間の骨髄移植及び腎臓移植については、鳥取県内で唯一の施設認定を受けており、幹細胞移植や腎臓移植など移植医療の臨床を研修・体験することができる。

また、山陰で初めて腹腔鏡手術のシミュレーター「LAP Mentor」を導入し、外科系医師の術者としての感覚や技術をさらに磨き、実践につながる技能を修得することができるようトレーニング環境を整備。とくに若手外科系医師や研修医、腹腔鏡技術認定医を志す医師にとって強力な味方となっている。

KLINIKOS BACK NUMBER

バックナンバー



トップインタビュー
鳥取大学医学部附属病院院長
豊島 良太氏

この人に注目
鳥取県立総合教育センター 療育支援シニアディレクター
北原 信氏

鳥取で活躍する女性医師
鳥取大学医学部皮膚病態学講師
山田 七子氏

来たれ研修医!
鳥取県立中央病院

病院探訪
日南町国民健康保険日南病院

2010年冬号



トップインタビュー
鳥取県立中央病院院長
武田 俣氏

この人に注目
独立行政法人国立病院機構 米子医療センター院長
濱副 隆一氏

鳥取で活躍する女性医師
鳥取大学医学部附属病院 内分泌代謝内科（第一内科）
大倉 裕子氏

来たれ研修医!
鳥取大学医学部附属病院

病院探訪
智頭町国民健康保険智頭病院

2010年春号



トップインタビュー
鳥取市立病院院長
田中 紀章氏

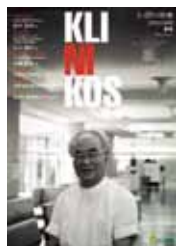
この人に注目
鳥取大学大学院医学系研究科教授 / 鳥取大学染色体工学研究センター センター長
押村 光雄氏

鳥取で活躍する女性医師
智頭町国民健康保険智頭病院内科
渡邊 ありさ氏

来たれ研修医!
山陰労災病院

病院探訪
岩美町国民健康保険岩美病院

2010年夏号



トップインタビュー
鳥取県立厚生病院院長
前田 通郎氏

この人に注目
社会医療法人工研会
藤井政雄記念病院副院長・緩和ケア科病棟長
足立 誠司氏

鳥取で活躍する女性医師
鳥取赤十字病院眼科副部長
高橋 芳香氏

来たれ研修医!
鳥取生協病院

病院探訪
日野病院組合日野病院

2010年秋号



トップインタビュー
独立行政法人労働者健康福祉機構
山陰労災病院院長
石部 裕一氏

この人に注目
自治医科大学とちぎ子ども医療センター 小児科研修医
大谷 英之氏

鳥取で活躍する女性医師
鳥取県立厚生病院外科
田中 裕子氏

来たれ研修医!
日本赤十字社鳥取赤十字病院

病院探訪
南部町国民健康保険西伯病院

2011年冬号



トップインタビュー
鳥取県立総合療育センター院長
鱧 俊朗氏

この人に注目
鳥取大学医学部救急・災害医学分野教授
鳥取大学医学部附属病院 救命救急センターセンター長
本間 正人氏

鳥取で活躍する女性医師
鳥取生協病院内科医師
平田 雅子氏

来たれ研修医!
鳥取県立厚生病院

病院探訪
江府町国民健康保険江尾診療所

2011年春号



トップインタビュー
鳥取赤十字病院院長
福島 明氏

この人に注目
鳥取大学医学部生殖機能医学教授 低侵襲外科センター長
原田 省氏

鳥取で活躍する女性医師
独立行政法人国立病院機構
米子医療センター 耳鼻咽喉科
山本 祐子氏

来たれ研修医!
鳥取市立病院

病院探訪
鳥取県中部医師会立三朝温泉病院

2011年秋号



トップインタビュー
鳥取生協病院院長
齋藤 基氏

この人に注目
鳥取大学医学部地域医療学講座教授
谷口 晋一氏

学会ルポ
第4回鳥取県国保地域医療学会

来たれ研修医!
国立病院機構米子医療センター

2012年春号



トップインタビュー
鳥取大学医学部附属病院院長
北野 博也氏

この人に注目
鳥取県立中央病院麻酔科
乗本 志孝氏

鳥取で活躍する女性医師
湯川 喜美氏

病院探訪
鳥取県済生会境港総合病院

研修医に聞く
鳥取県立厚生病院

2012年秋号



トップインタビュー
鳥取県立中央病院院長
日野 理彦氏

この人に注目
鳥取大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科
國本 泰臣氏

鳥取で活躍する女性医師
鳥取大学医学部附属病院 女性診療科
数田 結子氏

病院探訪
国立病院機構鳥取医療センター

研修医に聞く
鳥取市立病院

2013年春号



トップインタビュー
鳥取市立病院 病院長
山下 裕氏

注目の医師
独立行政法人国立病院機構 米子医療センター 副院長
杉谷 篤氏

輝き続ける女性医師
武信眼科 院長 鳥取医師会理事(女性医師対策 主担当)
武信 順子氏

鳥取の病院から
医療法人十字会 野島病院

鳥取の研修医たち
鳥取大学医学部附属病院

2013年秋号

編集後記

今回の取材で初めて「大山(だいせん)」を観ることができた。「大山」は、古くから日本四名山に数えられ、日本百景にも選定される標高1,729mの独立峰。その美しさと雄大さは世界遺産の富士山に勝るとも劣らない。眺めているだけで心が安らぎ、時間を忘れるほど見入ってしまった。そして鳥取の医師たちにも、「大山」から感じたそれと同じような感動があった。鳥取の医師たちには、医師として、そして人間としての器の広さと深い優しさがあり、医療に対する大きな熱い志があった。



STAFF CREDIT

発行	鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課 (http://www.pref.tottori.lg.jp)
編集制作	【民間医局】株式会社メディカル・プリンシプル社 (http://www.medical-principle.co.jp)
制作協力	株式会社メディア出版
アートディレクター	勝又シゲカズ
ライター	田口素行 高城好男 木下あやみ
カメラマン	小山英樹
デザイナー	正代結希

地域医療に関心のある方へ

鳥取県医師登録・派遣システム（ローテートコース）
複数の公立病院等をローテートしながら、鳥取の医療の現場を経験できます。
（その間に研修を行うことができます）

子育て等で現場を離れ、復職を考えている方へ

鳥取県医師登録・派遣システム（子育て離職医師等復帰支援コース）
●鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス支援センターと協力し、
現場復帰のための研修を県立病院、鳥大附属病院等で行います。
●研修後の復職についても、仕事と家庭の両立に配慮した医療機関を紹介します。

キャリア形成を考えている方へ

鳥取県専門研修医師支援事業
県外の医療機関に県職員として研修派遣します。
鳥取県医師海外留学資金貸付制度
海外留学のための資金を貸与します。

鳥取県内の求人情報を探している方へ

県内医療機関の求人情報の提供、あっせん、紹介を行います。

見学を希望される方へ

●県外の方で病院見学を希望される場合は、旅費を支給します。

<http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/>

鳥取県 医師確保

検索

鳥取県は医師のキャリア形成、
子育て後の復職などについて積極的に
支援しています。

鳥取県で
働いてみませんか。

鳥取県で 初期臨床研修を しませんか。

鳥取県臨床研修指定病院協議会の事業

- 研修医の受講する救急講習（ACLS,BLS,ICLS）受講料を助成します。
- 年1回各病院の研修医が集まる研修医交流会を開催します。
- 研修医を対象とした著名講師による臨床研修医セミナーを開催します。
- 鳥取県東部4病院（県立中央病院、鳥取市立病院、鳥取赤十字病院、鳥取生協病院）にマッチングした研修医は、様々な特色を持つ4病院で希望に応じた研修を行うことができます。

鳥取県は県と県内臨床研修病院が協議
会を立ち上げ、研修医のための様々な取
り組みを行っています。また、医学生が県
内臨床研修病院を見学する場合には旅
費を支給しています。

鳥取県臨床研修指定病院協議会のホームページをぜひご覧ください

鳥取県の臨床研修病院の魅
力を知っていただくため、ホー
ムページを作成しています。
各病院の最新情報、プロモ
ーションビデオなど魅力満載で
すので、ぜひご覧ください。



<http://www.tori-rinsyou.jp/index.php>

鳥取県 臨床研修

検索



【お問い合わせ】 鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課医療人材確保室

〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1-220 TEL:0857-26-7195 FAX:0857-21-3048

Mail:ishikakuho@pref.tottori.jp